

龍仁を取つて生来一其原州に在る者ハ砥平楊根楊州廣
州よりして京に抵る元豪敵と驪州の龜尾浦まで鐵橋
利川の府使邊應星ハ船に射本と載せ霧に乗じて敵を驪
州の馬灘に邀て敵を殺す事頗る多し是は由て原州の敵
ハ往來の路と遂に断ち悉く忠州の路よりこの往來せし
利川驪州楊根砥平等の邑民共敵に鋒先きを討洩す
ハ元豪が功なりと皆思ひけり巡察使柳永吉又元豪
と催促して春川の敵を討ためしむ元豪既ハ龜尾まで勝
ちしゆゆ志願る敵を輕むざるの意あり敵ハ元豪が將よ
至らし事を知り伏兵と設け待居たるを元豪知りて兵

と進むるは伏兵發して遂に多しを殺さしたる是は於て
江の一道に敵と禦る者なるを云ふ

福島勢在番永川慶州落城之事

日本去る四月以來切取たる慶の諸道の郡邑は軍兵と
分け各番を持して守る慶州ハ福島左衛門大夫正則
の本物番を持して永川慶州の内も福島勢守る居たり朝鮮勢
拂曉に押寄せ攻戦ふ不意を討れ日本軍剛に負けて敗北
に及びゆえ永川を朝鮮勢取復たぬ茲は又慶尚道の部
將も兵を引具て慶州の城に攻寄せし此城は福島正
則の家臣多川内記番を以て守る居たるが士卒と

所より鉄炮と巖を撃ちて發ちし時と見合せ討て出敵と追
ひ退けし或夜敵よりこも夥多し大砲と城中一發ら
懸け本丸乃庭小落々々番卒の者思ひも寄らぬ所より聞
きたる事も無き響きまゝく小百千の雷一度は鳴落るの
如くありて飛丸數千發り出てあまの中より即死する者
二三十人又中らざる者數十人こげ仆れ絶えし事さづ
かして後藥と興一水と吞まめて漸く人心地出来たり
倭軍大に驚き怖し何れも舌と卷き翌日内記士率を後一
城と棄て西生浦一列取たり

朝鮮 訓練副奉事 軍士の才と試し藝と練る後 權應銖鄭太任

等千餘人の郷兵を以て永川の敵と圍くは軍士敵と畏
れて進まざるをゆゑ權應銖數人と斬りけし巴士率我
先少と奮い進み城を踏して打入り敵と城内の路より戦
ひの敵勝利なく奔りて倉中に入り或ハ明遠樓より上る
もいさしと朝鮮の軍勢火を掛けたるは悉く焼死志
す臭き事數里より及ぶより討洩されし敵數十遁
りて慶州より歸りしは是より新寧義興義城安東等より居け
る敵も皆一路を集りしゆゑ左道の郡邑保つ事と得たり
は全く永川の一戦に功なり

左兵使朴晉ハ初め密陽より奔りて山中に入りしは前兵使

李璠が城を棄て逃げ奔ると以て其居る處を誅せしめ
其代を以て朴音と兵使といふ時敵兵行在辺境に充滿
て南小通せざる事久しうなれば人心揺動如何にもなる
所を知らざるをふ朴音兵使となつたると聞及びて散
民ども稍集まり守令も跋く山谷の中より出て其處の事
は益々始りて人々朝廷有る事を知りぬ權應銖が永川の城
を復さるに至りて朴音も左道の兵一萬餘を率ひ進んで慶
州の城下を攻寄せしめ敵ハ潜り北門より出て後ろの
陣を廻り不意と襲ひつゆゆ朴音奔りて安原に還り其
夜又人を遣りて慶州の城下を潜り伏せ置き震天雷と

發させしめ城の中へ入る客舎の庭中に墮つ日本勢其
製法を曉らば争ひ聚りてこれを觀相與に推轉して諦し
視たりしに仕込に置たる丸の中より少許發りおろし其聲天
地を震ひ鉄片星の如く砕け出て中より即座に斃る
者三十餘人未だ中らざる者も六顛れ休し良久して起上
り驚き懼れざる者莫らざる其法製を測り得ざるゆゑ皆
く以為神也といふれしに因りて明日遂に殘らば城を棄て
西生浦に遁れ歸りぬ朴音遂に慶州に入ると殘るる米穀
萬餘石を得たり此事國王に聞え朴音ハ嘉善從二に陞り
應銖も通政品三に陞り大任ハ醴泉の郡守なり抑此の震

210.9
5

朝鮮征討始末記卷之四終

天雷と云ハ古一其製無^く軍兵寺の火炮^を李長孫と
云者創^りて作^り出^して震^ら未^だ雷^を取^りて之^を放^して飛^ぶ
事五六百歩^に至^りて地^は墜^ちて良^く火^を鉄丸^{の中}に
了^る發^る仕^掛て敵軍^を最^も此^の物^を畏^れと成^す

朝鮮征討始末記卷之四終

對州 山崎尚長輯 村倉治郎蔵板

嘉永七甲寅初冬刻成

京都

三條通升屋町
出雲寺文治郎

心齋橋通博勞町

大坂

河内屋茂兵衛

心齋橋通安堂寺町

秋田屋太右衛門

江戸

本町三丁目

和泉屋善兵衛行發